

## 2025年のストーリー

### ③ 人生の最終段階を過ごすシニア

2017年  
2020年  
2025年

- ◇ 2017（平成 29）年現在、75歳の女性
- ◇ 50歳の娘と二人暮らしで、できるだけ家事をこなす
- ◇ 2016（平成 28）年に夫は他界

#### 【2017年】

現在 75歳の女性、50歳の娘と二人暮らし。夫は昨年、他界した。家事はできる限り自分でしており、楽しみは娘との晩酌や温泉。自宅は築 40年。入居当時新興住宅地だったため、近隣には同年代の人が多くて付き合いも長い。自宅には近所の人々が訪ねてきて、お茶を飲みながら話をしたりと賑やかだが、最近、その中で、施設に入ったり、病院に長期入院したりする人が多くなってきた。

自分は、今まで大きな病気を患ったことがないので、病院にも殆ど行かない。まだまだ元気だと思っているが、死ぬまでこの家で、娘や近所さんと過ごしたいと思っている。娘にもそのことをいつも話していて、娘も「お母さんの望むようにしてあげたい」と言ってくれている。

先日、老人会の集まりに、区役所の人や介護事業所の人たちがやってきて、「2025年には団塊世代が全員 75歳以上になるので、その時期に向けて、できる限り、住み慣れた地域で本人の望む最期を迎えられるような体制づくりを目指す」と話していた。この近所だけでも同年代の人たちはたくさんいるけど、そんなことができるのだろうか…。

#### 【2020年】

夏頃から食欲がなく、体調が悪かった。年のせいと思ってそのままにしていたが、2〜3か月で体重が 4kg 減ってしまったので、娘に促され、病院で検査してもらった。検査の結果、がんが見つかり、手術と抗がん剤の治療をし、現在は、日常生活に気を付けながら、定期的に通院している。

#### 【2025年】

現在 83歳。がんが再発してステージ 4と告知された。身体のおちこちに転移しており、積極的に治療をしても余命 1年とのことだが、入院して抗がん剤治療を行なった後、緩和ケア病棟への転院か、自宅又は老人ホームで療養をすることになった。

今後のことを  
はっきりと  
決めないまま退院

在宅医療を利用し  
自宅療養を選択

老人ホームでの  
療養を選択

2025年

治療が終わった後、病院の担当医から「今後は、痛みなどを取り除く対症療法が中心になります。娘さんともよく相談し、これからどこで、どのように過ごすのが良いか一緒に考えましょう。」と言われた。

娘は仕事で忙しく、相談もできないまま退院日を迎え、とりえず自宅へ帰ることになった。ソーシャルワーカーからは、近所の病院や介護保険の手続きについて紹介してもらったが、数日は自宅に帰れた安心感もあってか調子が良く、相談や手続きは後回しになっていた。

ある日、夜中に発熱と強い痛みで襲われ、救急車を呼んだ。入院していた病院では、今日是对応できないとのこと別病院に搬送され、熱と痛みを抑える点滴のみで帰すことになった。

娘は今後、何から手をつけて良いかわからないと、途方に暮れている。

2025年

夫との思い出のある家とこの地域で過ごしたいという思いから、自宅療養を選択した。自宅では、訪問薬剤師が病院から紹介された訪問診療医と相談しながら痛みの緩和をしてくれた。食事が入らないときには、管理栄養士が私の好みのものを食べやすく調理する方法を提案してくれ、歯科医師が誤嚥性肺炎を起こさないよう、飲み込みの訓練や口の中のケアもしてくれた。

また、娘が私の介護を休めるように、私がショートステイできる体制をケアマネジャーが中心になり整えてくれた。その他、看護師やヘルパー等もその時々私の状態を共有しながら療養生活を支えてくれた。

おかげで、調子の良い時は娘と近所の人と一緒に旅行ができた。

私のペースや気持ちを尊重してサポートしてもらい、自宅療養を選択してよかった。

2025年

できれば自宅の近くで、訪問診療が可能で、看取りもしてくれる、という条件で病院の医療ソーシャルワーカーや娘と相談し、住宅型有料老人ホームを選んだ。不安もあったが、夜中でも介護士の方に相談できるという安心感があった。

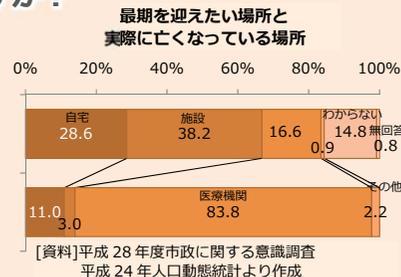
老人ホームには、私と同じようにがんが再発した人もいて、お互いに悩みを話し合おうという関係がつけられている。また、ホーム内で週 1回、地域の人たちが立ち寄れる「介護相談カフェ」を開いていて、近所の人と話す機会もある。

自宅で過ごしていた時と同じように過ごせる所を選ぶことができてよかった。



### ？ 人生の最期、どこで迎えたいですか？

- ◇ 福岡市民の満 20歳以上では、人生の最期を自宅で迎えたい方が 3割弱、施設で迎えたい方が 4割弱となっています。
- ◇ しかし現状では、医療機関で亡くなる方が 8割強となっています。
- ◇ 今後亡くなる方が増えると、最期まで病院で療養することが難しくなる可能性があります。



### ？ 在宅医療・在宅介護に携わる専門職が支えます

- ◇ 在宅医療・介護を選択するうえで、専門職は心強いパートナーです。退院時から多職種で話し合い、ご本人や家族の不安、病気で気をつけるべきこと等を共有して、本人の選択を支えてくれます。
- ◇ 最近では、自宅療養を支える医師・歯科医師・薬剤師・訪問看護師等も増えてきており、病気だからといって、必ずしも在宅生活を諦めることはありません。